
幼馴染 恋人になる条件

りんか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼馴染 恋人になる条件

【Zコード】

Z0097Z

【作者名】

りんか

【あらすじ】

「結婚してください」！！ そうプロポーズしてきたのは、小学三年生の幼馴染の男の子。「あと15年経つてカッコイイ男の人になつてたら、考えてもいいかも」と答えた次の日。高校生である相原美結の前にあらわれたのは、20歳くらいの超絶イケメン。その彼が面と向かっていきなり告げてきたのは、「結婚してください」という突拍子もない言葉だった。いろいろな条件をつきつけて彼らの求婚を逃げ続けるものの、なんだかなし崩し的に話が進んでしまっているような気がしてならない彼女と、そんな彼女にふりまわ

されているはずなのに、異世界で最強の力を手に入れたおかげで、なんなく条件をこなしていつてしまう彼とのラブコメディ話（の予定）。

(一) (前書き)

ちょっと愚鈍ついのがあり、衝動的に書いてみました。不定期更新になりますが、よろしくお願いします。

(一)

「結婚してすぐださー……」

家を出で、高校へ向かう途中の通学路。突然響いたその言葉に、
私は目を何度も瞬かせながら振り向いた。

そこには、ランドセルを背負った小学三年生になつたばかりの男
の子。その子が、すく真剣な顔でこちらを見上げている姿があつ
た。見慣れたその子に、私はふつゝと息を吐く。

「おはよー、あっくん」

軽くあいさつをすれば、黄色い帽子に包まれた頭をずすりと私
の方に押しやりながら、その子　あっくんはあいさつの返答もそ
こやけに、私へつめ寄つてくる。

4

「ねえねえ、いつ結婚してくれる?」

「いつって、それ昨日も一昨日もその前もきいてきたじゃなーの
」「だつて、ちゃんと答えてくれないんだもん」

ふつと頬をふくらませるあっくんに、私は苦笑いを浮かべた。
そういう話題はあまり興味がない、と言つたりもつと怒るんだろ
うな、この子は。

私は「うーん」と首をひねりながら、まつすぐ立てた人差し指を
唇に当てた。

「そうだなあ……、あと15年経つて、あっくんがめりやくちや力
ツ『コイイ男の人になつてたら、考へてもいいかも』

私の答えに、あつくんの顔がぱあっと輝いた。

「15年だね？ わかつた。絶対だよ？ 約束だからね、みゆ美結おねえちゃん！」

駆けていく背中を見送りながら、私は手を左右に振った。

可愛いなあ、と朝からほのぼのしてしまつ。今日で何度もだらう、あつくんからのプロポーズ。今まで「急いでいるから、また今度ね」と適当にあしらってきたけど、今日は何となく条件を出してしまつた。

彼は、将来イケメンになるんだろうな。幼いけれど、すこしく整つた顔立ちをしているもの。

15年……、かあ。思いついたまま口にしてしまつたけれど、15年も経つたら、私は三十路超えのおばさんだ。どう考えても、眼中にはないだろ？

「ま。もともと私、年下には興味ないしね」

わらじめくへつて、私はこつものコースで高校へと向かった。

「結婚してください」

「……は？」

私の前には、ちよつと変わった服装に身を包んだ背の高い超絶イケメン。

その彼に、私は通学途中の道ばたで、いきなり面と向かってそう告げられたのだ。

なんで？ ビックして？

私の頭を、？マークが大量によぎつていいく。

「あの、誰かと間違つていませんか？」

「いや。きみは、相原美結さんでしょ？」

「そうですけど……、どうして私の名前を知つているんですか？」

「幼馴染だからね、きみとおれは」

「はい？」

いやいやいや。

私の幼馴染に、あなたのような超絶イケメンさんは、ビックをひつくり返しても出てきませんから。

「やつぱり人違いですよ。他の“相原美結”さんを当たつてくれ下さい」

そう言つて、私は彼の横を通り過ぎようとする。

と。私の手首がガツとつかまれ、振り向いた私に彼がつめ寄つてきた。その真剣な顔立ちに、私はデジヤブを感じ思わず息をのむ。

「あの言葉は、嘘だつたんだ？」

「あの言葉……つて」

たずねられても、私には心当たりが全くない。

そんな私に、彼は少しだけさびしそうな表情を浮かべた。

「15年経つたら結婚してくれるって言つたじゃないか。美結、お

ねえちゃん

「……！」

その言葉に、私は絶句してしまった。

確かに言った。確かに昨日、この場所でそう言った。

でも、ちょっと待つて。それを言った相手は、昔から知っている幼馴染の小学二年生の男の子で。どう考へても、目の前の超絶イケメンと結びつかない。だけど、そう言ったのはあの子にだけで、しかも他に兄弟のいない私を“おねえちゃん”呼びわるるのは、あの子だけしかいないと思う。

いやそんな。まさか、もしかしてもしかする、わけ？

「……あっくん、なの？」

「そうだよ」

そのあっせりとした返事に、私はただただポカーンとなりながら、目を見開くだけだった。

(2)

……ハツ。

秒針がきつちり一回転したんじやなかひつか、それくらこまつち
り間を置いて、私は我に返った。

ありえない。落ちついて普通に考えてみたら、ありえない。そう、
ありえないでしょうが。

この超絶イケメンが、幼馴染で小学三年生のあっくん？ そんな
簡単にイコールで結びつくわけがないってば。
なにこれ、新手のあっくんですよ詐欺？ ああもへ、よくわから
なくなつてきた。じづこつときは

「じゃあ、そういうこと？」

なかつたこととするのが一番だよね。学校に遅刻するトマズイし、
うん。

通り過ぎようとした私の手が、再び引かれる。しまつた、手首つ
かまれたままだった。

「ちよつと待つてよー。まだ、何か足りないものもあるの？ 約
束どおり、15年経つたからきみを迎えてきたのに」

いやあの、意味がわかりません。

15年経つた？ 昨日の今日で、まだ一日しか経っていないはず
なんですかね。

それより何より。

「本当にあっくん、なの？」

「やつだよ。きみの家の一軒隣に住んでいた、瀬田秋斗^{あきと}」

超絶イケメンが名乗った名前は、確かにあつくんの本名だった。

「なら、証拠はある？」

「証拠？……困ったな。こっちの世界のものは、全部彼に処分されてしまったんだ」

「ん。こっちの世界？ 処分？ なんのこと？」

なんとなく気になるワードが並んだけれど、超絶イケメン い加減この呼び名も疲れたし、超イケに略しちゃおう。
考える仕草を見せていた超イケは、ふいに「ああ、そうだ」と手をたたいた。

「証拠になるかわからないけど、おれが覚えているきみの情報を話してみるよ。相原美結、17歳。ちょっとくせつけの黒髪黒目の純和風人。×高校三年生。両親が海外赴任のため、今は一人暮らし。兄弟姉妹はない。掃除は得意なのに、料理は壊滅的。自分では美味しいと思っているものだから、たちが悪い。この前……、でいいのかな？ 砂糖と重曹を入れ間違えて斬新すぎるクッキー？ みたいなのを作ったこと、あつたよね？」

「ちょっとそこ。クッキー？ とか疑問系にしないで。

あれはクッキーだったの。誰が何と言おうとも、ひよこ型のクッキー。

まあ少しいびつになっちゃって、うねうねとした怪しい生物になってしまったけれど。

「砂糖と塩を間違えるのは聞いたことがあるけど、重曹って。……ああ！ もしかして、砂糖じゃなくてベーキングパウダーの代わりに

入れたの？ それなら、納得かな」

「え、と別にそういうわけじゃ……」

「重曹を使おうなんて、普通思わないのにね。でも、一人暮らしの女子の子の家に食用の重曹がある時点で、めずらしくてす」「ことか

腕組みして感心したようにうなづく超イケに、私は苦笑いを浮かべた。

全然きいてないし。なんなの、この自然にプラス思考というか、天然っぽいマイペースつぱりというか。

けど、このことを愚痴 もとい、話した異性はあっくんだけだ。まさか本当の本当に、この超イケは……。

「ね？ こんなこと知っているのは、おれが正真正銘の秋斗だからでしょ？」

嬉しそうに告げてくる超イケに、私は口ごもる。
もし仮にこの超イケがあっくんとして、どうして急にこんな姿になつたわけ？ 現実では、絶対にありえない。まさか青いロボットの力を借りて、未来からタイムスリップしてきたとか？
そういえばさつき、なんかちょっと引っかかりのある言葉が。

一人無言で考えていた私を、どうやらまだ疑つていると思つたらしい超イケは、「まだ信じられないの？」と嘆息した。

「なら、とつておきの情報を一つ。きみ、家ではノーブラで過(い)しているよね？ 前にきみの家にお邪魔したとき、ちゅうぶん窓から差し込んだ光にシャツが透けて

「わあわあわあ」

なにつ？ なにを突然言つちゃつてくれるの、この人！？ 思わず胸元を両腕でおおう私に、超イケはニコッときわやかな笑みを向けてきた。

「す、」くドキドキしたんだから、おれ。相手が小学生だからって、警戒心なさすぎ。とまあ、これで信じてもらえた？」

(3)

た、確かに超イケが言ったことは正しい。

私は、不自然なほどにゆっくりと胸から手をぬりすと、身体を斜め45度ほど右に動かした。

「まあ、うん。どうしてそうなったのか全然理解できないけど、超イ……もとい、あなたが“あつくん”だつてことは信じてもいいかもしねない」

深呼吸を繰り返しながら答えた私に、超イケの表情がまぶしいほどに輝き始める。それが、初めて結婚の条件を出したときのあつくんと重なった。

「うわ……、そういうばいんな顔してたなあ、あの時も。本当の本当にあつくん、なんだ。

少しだけ感じ入っていた私に、彼は嬉々としてサラリと告げてきた。

「なら、おれと結婚していく

「それとこれとは話が別」

あつくんの言葉をさえぎり、私はそう言いはなった。途端、見る間にあつくんの表情が暗いものになっていく。恨めしそうな視線をむけてくる彼に、私は思わず目をそむけた。

「そ、そんな顔しても駄目。だって、言つたでしょ？ 15年経つて、めちゃくちゃカツコイイ男の人になつてたら、考えてもいい“かも”って」

15年経つて、めちゃくちゃカッコイイ男の人になつてたら
その部分は、否定できそうにない。

イケメンになるだらうな、とは思つていたけれど、まさかこんな、
某アイドルグループも裸足で逃げ出しそうなほどになるなんて……、
予想外すぎです。

「それにね、女性に結婚を申しこむんだつたら、やっぱり何かしら
の贈り物が必要だと思うの。えつと、そつ。婚約指輪とか」

「婚約、指輪？」

「そうよ。よくテレビドラマでもやつてるでしょ？ 給料の三ヶ月
分です、みたいな。あつくんがどれだけ私のことが好きなのか、態
度で示してもらわないと。ちなみに私、そんじょそこのらのダイヤと
か、普通の宝石には興味ないからね？ どびつきりリアな感じじゃ
ないと、受けつけません」

われながら、むちやくちやな条件だ。

でも、結婚なんてまだ考えられないし、しかも相手は、見た目が
変わつてしまつたとはい、幼馴染のあつくん。正直、恋愛対象と
しては全く意識したことがない。

無理を言つてあきらめさせた方が、彼にとつてもいいに違いない
よね。

それが通じたのかどうか、彼はふう、と短く息をはいた。

「……確かに、プロポーズするのに手ぶらといつのも、おかしな話
だつたね。わかつた、婚約指輪を持つて出直すことにするよ」

その台詞に、私は胸中でひそかにガツツポーズ。
ん。出直す……？

「でも、きみの氣に入る指輪を持つてくれることができたら、今度こ

それと結婚してくれる?」「

私が彼の言葉にひつかかりを覚えているうちに、彼は真剣な表情でつめよつてくる。その様子は、ほんとあっくんと同じもの。変わらない、なあ……。

そう、しみじみと感慨にふけついたら、私は曖昧ながらも首を縦に動かしていた。……あれ?

彼の落胆していた顔が、一瞬にして満面の笑みになる。

「絶対だよ? 約束だからね、美結おねえちゃん!」

駆けていく背中 私の記憶の中にあるものより、はるかに大きくなってしまったそれを見送りながら、私はひしひしと押し寄せてくるデジヤブを感じて止まなかつた。

* * *

次の日。また同じ通学路を歩きながら、私はキヨロキヨロと辺りを見渡していた。

人通りの少ない、静かな通り。いつもと変わらないその場所に、私は吐息をついた。

昨日のあれは、やつぱり夢か幻? そつか。私もついに、夢遊病をわざらうようになったのか。とはいっても、すごくリアルすぎた夢だったような気がするけれど。

(4)

それに。

ここに来る途中、ちょっと気になつて一軒隣の家をのぞいてみたら、不思議なことが起きていた。

一昨日までは確かにあつたはずのあつくんの家が、文字通り消えていた。ポツカリと空き地になつていたわけではなく、両隣だつたはずの二つの家がそこには仲良く並んでいて。

まるで、あつくんの家自体、ここには存在していなかつたようだつた。

「どうなつているんだか……」

首をひねるものの、それで答えが出るわけもない。
その後私は、いつものよつて平穏無事に高校へとたどりつくことができた。

一日の授業が終わり、帰宅部の私は早々に学校を後にした。朝来た道を、今度は逆に進んでいく。

ああ、そうだと空の雲を見ながら思い出す。牛乳切れてたんだっけ、買い物に行かなきや。そつき通り過ぎた交差点を右折して　あ。

そういうえばここは、と気づいて、私は後ろに戻しかけた視線を前に向けた。その先には　、昨日と同じ、ちょっと変わった服装に身を包んだ背の高い超絶イケメン。

しまつた、帰り道はノーガードだった。

「美結おねえちやん…」

私を見つけてしまったらしい、後方からあがる嬉しそうな声。私はそれをなかつたことにして、早々に来た道を引き返し始めた。

「ま、待つてよ… どうして帰つちやうの?」

「どう見てもあなたの方が年上っぽいのに、私を“おねえちゃん”って呼ぶのおかしいでしょ?だから、私を呼んだんじゃないんだと思つて」

「そんなこと言われても、おれ、きみをそう呼んだことしかないしそう。じゃあ、なんて呼んだらいい? 美結ちゃん? 美結さん?」

セヒで一度言葉をくしゃつた超イケは、少しどとまどつたあと、ゆつぐつとその言葉を口にした。

「美結」

「……！」

それが耳をうつた瞬間、私の心臓が大きさなほどに飛びはねる。ストップ! ストップ! 呼び捨てはちょっと……、駄目っぽいです……! 横に並んだ超イケに、私は思わず抗議の眼差しを向けた。すると、彼は少し照れたように頬をかく。

「つて、さすがに呼び捨てはすぐに慣れそうにないから、とりあえず、美結さんでいいかな?」

そう告げてくる超イケに、私は「クククと何度もうなづいた。呼び捨てにされるより、全然いいです。ぜひ、そつしてください。

「じゃあ、美結さん。あらためて、おれと結婚してください」

また、それですか。と、私が嘆息するのと、彼が懐から何かを取り出すのは、ほぼ同時だった。

差し出されたのは、革製の、なんだか上等そうな雰囲気の小箱。見当もつかない私は、当然のように首をかしげた。

「なに、これ？」

「なにして、きみが望んだものだけぞ」

「はい？」

私、なにか望みましたつけ。……あ。

私が思い出すのと一緒に、小箱が開けられる。そこからあらわれたのは、大人が親指の爪と人差し指の爪をくつつけて を作つたらいに大きな宝石。超イケが少し動かすと色が変わり、数えた限りでは七色はあった。

えつと、これはその、もしかして 。

「婚約指輪、これでどうかな？」

やつぱり、そうですか。

私は、自分の口元がいやでも引きつるのがわかつてしまった。

「宝石自体は、あっちの世界のドラゴンの王が持っていたからすぐ 倒して手に入れたんだけど、それを指輪に加工するのに手間取っちゃつて……。遅くなつて、ごめんね」

かすかに眉を寄せながら、超イケがそう謝つてくる。

あの、ですね。私の気のせいならいいんですが、この人さり気に 今、ものすごいことを言ひませんでした？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0097z/>

幼馴染 恋人になる条件

2011年12月5日20時45分発行